

いばら姫に最初のキスを

目次

いばら姫に最初のキスを

5

大和撫子やまとなでしこに出会えたら

183

ラッキーガール

287

いばら姫に最初のキスを

高砂たかさごの金屏風きんびょうぶの前に、白無垢しろむく姿の花嫁が座っている。角隠つのかくしと俯うつむいているせいで赤い唇しか見えないから、その表情はわからない。その隣で満足げな顔をして座っている新郎は、彼女の父親と同じくらいの年齢に見えた。

六月最後の日にジューン・ブライドとなった新婦は、わたし麻生雛子あそうひなこの友人だ。ただ、友人と言えるほどの付き合いはない。本当の親友、京極綾女きよごくあやめの言葉を借りれば、わたしたちは“ご学友”と言っらしい。

私立聖女学院せいじょがくいん。巷ちまたでは秘密の花園と噂され、良家の女子しか入学できないと言われている、幼稚園から大学までの一貫校。

カトリックの教えを教育方針に掲げ、学業とは別に調理や裁縫さいほう、茶道さどうに華道かどう、あらゆる作法を徹底的に学ぶことになっている。要は良妻賢母に育てることをモットーとした学校だ。

その卒業生の多くは、旧家や大手企業の経営者たちのもとに嫁いでいく。聖女学院の卒業生を妻に持つことは、ステータスの一種だそう。事実、大学を卒業して二年経った今では、“ご学友”の多くはすでに今日のような政略結婚で嫁いでいた。

わたしにもこれまでお見合い話がなかったわけではない。いや、実を言えば卒業する前から話だけはたくさんあった。そのすべてをわたしは片っ端から断っている。

……まあ半分以上は兄も関わっているはずだけれど。

小さな頃の夢はお嫁さんだったし、結婚してもそれなりにやっていけるだろう……とは思う。ただし、料理と裁縫さいほうはからきしで、シスターに何度やり直しさせられても、卵焼きも、スモックもともに完成しなかったけれど。

『あなたは将来、家事を他の方にしていただいた方がよろしいでしょう』

焦あせげを通り越して炭すすのようになった卵焼きとボロ雑巾ぞうまきんみたいなスモックを見ながら、心底呆れた顔をしたシスターの顔は今でもよく覚えている。

でも、お見合い結婚を躊躇ちゅうちゆしているのはそれが理由じゃない。要は、わたしはまだ恋すらしていないのだ。幼稚園から大学まで、まわりにいるのは女性ばかりで、登下校は送迎が必須。これまで一人で出歩いたことは、ごく近所以外ほとんどない。時々、綾女に連れられて外出することがあるくらい。親しく話せる男性は父親と兄、そして神父様と近所のおじさんくらいだ。

二十四歳になっても、わたしの世界は狭すぎるくらいに狭い。

学生の頃、同級生が貸してくれたロマンス小説や漫画をこっそり読みながら、空想の中で白馬の王子様に恋をした。それなのに、いきなりお見合いで結婚するなんて考えられない。

確かにそれでも愛が芽生える可能性はあるし、幸せになれるかもしれない。だから、これまで嫁いでいった学友たちを否定はしない。

でもわたしは、本当の恋がしてみたい。そして結婚するなら自ら好きになった方としたい。ただ、その方法がいまだにわからないだけだ。

「雛子様、今日のお召し物、とても素敵ですわ」

隣に座っている女性がはにかむように笑った。彼女も同じ学校の卒業生で、二つ年下の後輩だ。「どうもありがとう」

微笑みを返しながら、そっと胸元に手をやり深呼吸をする。ダメダメ、すぐにトリップしてしまうのはわたしの悪いクセだ。

普段から着慣れているとはいえ、洋服に比べると着物は苦しい。しかも今日は結婚式なので、母が張り切って大振袖を着せてくれた。

目の覚めるような赤い生地の色鮮やかな花車が刺繍された着物と、金色の総刺繍の帯は、重量もそれなりにある。かんざしや髪飾りで結い上げた頭も重い。

着物も小物もたくさん持っている。なぜなら、わたしの実家は江戸時代から続く老舗の呉服屋だからだ。屋号は麻生呉服店。都心の真ん中にあり、店は兄が継ぐことになって、わたしはそこで事務仕事を手伝っている。

実はそれも不満の種だった。一般企業に就職しようとしたわたしを、「雛子には無理だから」と両親と兄が全力で止めたのだ。それに屈してしまった自分も情けなく、だから尚更日々悶々としている。

「雛子様、この後の二次会にはご参加なさいます？」

先ほどの後輩が言った。これまで幾度も結婚式に招待されたけれど、二次会に参加したことはない。なぜなら……

「あら、雛子様はそろそろお兄様がお迎えに来る頃合よね？」

かなり嫌味っぽい声と同じテーブルから聞こえた。ちらりと目をやると、同級生の一人、野島麻紀様がフンと笑っている。

彼女は高等部から編入してきた同級生で、編入早々、わたしが彼女の机の中にカエルを入れたことをずーっと根に持っている。

外部編入生に、マリア様の銅像前の池のカエルを贈るのは、聖女の伝統だと綾女に騙されたせいなのだから、恨むなら綾女を恨んで欲しいのに。

「雛子様は聖女の『いばら姫』と呼ばれるお方ですもの。そのような集まりに、出られるはずがないわ」

麻紀様の言葉に後輩は納得した様子で頷いているけれど、馬鹿にされているように感じるのはいかなるでもない、と思う。

そのとき、凜とした声が隣から聞こえた。

「そうね、昔から雛子のお兄様は鉄壁の要塞。まるで眠り姫を守るいばらのようなもの。麻紀様のおっしゃる通り、雛子はいばら姫の名にふさわしいわ」

テーブルに座っている全員目が集まると、彼女はそれを受けて艶やかに微笑んだ。真っ赤なドレスを着た彼女は、輝くばかりに美しい。後輩は頬を染め、嫌味な麻紀様も押し黙るほどだ。

京極綾女。京極グループという大企業の一人娘で、誰もが振り返るほどの美女だ。学生時代、一部の後輩から「白百合の君」とか呼ばれていたっけ。

わたしを「いばら姫」と名付けたのも実は彼女だった。

小学生の頃、どうやったら白馬の王子様と恋ができるのかと綾女に聞いたら、「雛子はお兄様の作ったお城の中で眠って待つてればいいのよ、眠り姫みたいに。ああでも、雛子の性格から言ったらいばらの方が合ってるわね」

と、それ以来、半ばからかうように綾女はいばら姫と呼ぶようになった。

そしてその理由も知らぬまま、学院の生徒たちがいばら姫の名が広がったのだ。棘が多いのは綾女の方だと思っのに。

綾女は表向きは華やかながらも、清楚に見える美女だけど、内面はかなりの毒舌家だ。幼稚園の入園式で泥団子をぶつけ合ったときから、わたしと綾女は親友になった。彼女の外見とは正反對な性格を誰よりもよく知っているのは、わたしだ。

わたしが恨みがましく綾女を見る中、彼女はちらりとも視線をよこさず話し出した。

「思い起こせば中学部の頃、シスター大原の目を盗んで、二階から木を伝って下まで降りる姿は、まるでラプンツェルのようだったわね」

懐かしむように話す綾女だけど、その話には当然ながら裏がある。

シスター大原は大勢いるシスターの中で、二を争う厳格さを持つ、家庭科の先生だった。その厳しい授業の最中、わたしは綾女とある賭けをしたのだ。

シスターに見つからず、窓のすぐ下にある花壇の花を取って来られたら、当時わたしが苦勞していた課題のブラウスを代わりに縫ってくれるというものだった。

そのブラウス制作のおかげで連日悪夢を見ていた当時のわたしは、その賭けに飛びつき、実行し、今思えば当然だけどシスターに見つかり大目玉をくらったのだ。

被服室前の廊下がその後数年にわたってピカピカに輝いていたのは、そのときの懲罰の賜物だ。

「そう言えば、調理実習で作ったクッキーを喉に詰まらせて倒れたこともあったわね。あのときは白雪姫のようだったわ」

ええ、そのこともよく覚えていますがとも。綾女の作ったクッキーを食べて、口の中の水分を全部持つていかれて苦しんだこと。大慌てでシスターがお水を持ってきてくださった隣で、綾女が大笑いしていたことも。

まあ、その後わたしの作った消し炭のようなクッキーを彼女に食べさせて仕返しはちゃんとしたけれど。

綾女の話の後輩は顔き、麻紀様は微妙な表情を浮かべている。彼女は途中編入なので、そのときの話は知らないのだ。まったく、フオローされたのか、けなされたのか、微妙なところだ。

わたしたちのテーブルが妙に盛り上がる中、披露宴は滞りなく終わった。二次会に出るという人たちは移動を始め、このまま帰るわたしと綾女は新婦にあいさつをして、大広間を出てホテルのロビーまで一緒に行った。

「お兄様はまもなく？」

綾女の言葉に自分の時計を見る。

「そうね、予定より少し早めに終わったから、ここで待つことにするわ」

そう答えてロビーの大きなソファに座った。綾女が入り口に視線を向けたのにつられてわたしも見ると、ちょうど真つ赤な車が停まったところだ。

「では、わたしは先に行くわ。じゃあね、雛子」

赤いドレスを翻して、綾女が颯爽と歩いていく姿を見送った。真つ赤な車から背の高い男性が降りてきて、彼女のためにドアを開ける。

綾女にはボーイフレンドがたくさんいる。しかもその方々は恋人ではないというのだから、ますます理解できない。

そして彼女は、自分自身で選んだ仕事をしている。そこは京極グループとはまったく関係のない会社だった。

綾女とわたしの違いはいったいなんなのだろう。性格の違いはあれど、同じ環境ですつと育ってきたはずなのに、綾女はわたしよりもずっと自由だ。

彼女がさつき言ったみたいに、わたしのからだは、いばらでぐるぐる巻きにされている。それはまるで繭のようにわたしをくるみ、その中は、決して認めたくないけれど心地よかった。

このままではいずれ、さつきの学友のように、両親と兄が認めた男性と、ちつとも幸せそうに見える結婚式をあげることになるかもしれない。それだけは絶対に嫌だ。

お話の中のいばら姫は、百年のまどろみを王子様のキスで終えた。でも現実の世界でそんなこと

はまず起こらない。

わたしももう二十四歳。これからの人生は自分の力で切り開きたい。このいばらを切るのは王子様の役目じゃない、わたし自身でなければ。

「おや、きみは新婦のご学友じゃないか？」

わたしの物思いを破ったのは、陽気な声だった。

顔を上げると、赤ら顔をした中年男性がニヤけた顔をして目の前に立っていた。服装とさつきの言葉から考えると、先ほどの結婚式の出席者なのだろう。

新郎と同年代だと思われるその男性がわたしの隣に断りなく座ると、微妙にお酒の匂いがした。とたんに嫌悪感に襲われる。ああ、絶対に無理だ。

「さすがは聖女学院出のお嬢様だ。大層なべっぴんだねえ」

その人が手を伸ばしてきた。とっさに身を引くと下品な笑い声を上げた。

「初々しいとはこのことだ」  
その手がさらに迫ってくる。着物の袖がからまって立ち上がれない。そのままじりじりとソファの端まで移動し、恐怖で固まってしまった。と、わたしの後ろから急に腕が伸びてきて、酔っ払い男性の腕を掴んだ。とたんに男性の顔が歪む。

驚いて振り返り見上げると、とても背の高い男性が目に入る。

そしてその方を見た瞬間、文字通り時間が止まった気がした。

恐ろしいほど素敵な人だ。彫りの深い端正な顔立ち、短く刈り込んだ髪の色は灰色に近く、そし

瞳は海のような鮮やかな青。

すらりとしたスーツ姿なのに、まるで騎士のようにも見える。

こんな素敵な男性はこれまで見たことがなかった。こんなに見つめるのはほしたくないと思うのに目が離せない。胸がドキドキと高鳴るのがわかる。目がおかしくなったのかと思うくらい、その方がキラキラと輝いて見えた。

ぽかんと口を開けたままわたしが見ていると、その方が目の前の男性に顔を寄せ何かをささやく。次の瞬間、男性は急に立ち上がって、転がるようにホテルから出て行った。

それを目で追い、ホッとすると同時に振り返ると、助けてくださったあの方も立ち去ろうとしていた。

「あ、あのっ」

ソファから立ち上がり声を掛けると、彼が振り返った。

ああ、なんて素敵な人なのだろう。

彼は驚くほどハンサムで、そして、やっぱり背が高い。首が痛くなるほど顔を上げて、改めて彼の顔を見た。

どこの国の方なのだろう。じっと見つめ返してくる青い瞳からは何も読み取れないけれど、その背中から後光が差しているかのようにまぶしかった。

呼び止めたくせに、胸がいつぱいになってお礼の言葉ひとつ出ない自分が情けない。

「雛子！」

呼ばれた声に弾かれたように振り返ると、兄がロビーに入ってきたところだった。

「兄様」

「遅くなって悪かったな。さあ帰ろう」

兄はわたしの荷物を持つなり、促<sup>うなが</sup>してくる。慌ててまた振り返ると、先ほどの彼はすでにどこか去过ってしまっていた。

ああ、そんな。まだお礼の言葉すら言っていないのに。

自分でも驚くほどがっかりしながら、迎える車に乗りこむ。

兄と結婚式の他愛ない話をしながらも、あの方の青い瞳が目には焼きついて離れない。胸のドキドキがまだ治まらない。それがさっきの恐怖のせいなのか彼のせいなのか、それすらわからない。こんなことは初めてだ。

そして、髪につけていたお気に入りのかんざしがなくなっているのに気がついたのは、家に帰ってからだだった。

結婚式から数日が過ぎたけれど、わたしの頭の中にはあの青い瞳の男性がずっといた。日々、思い出すのはあのとこのことで、そういう意味では実家で働いていることも悪くない。ぼんやりして



いても、誰にも何も言われないからだ。

……いや駄目だ、こんなことでは。自分の人生は自分で切り開こうと決意したんだもの。

わたしは、後ろ髪を引かれる思いで彼のことを振り切ると、事務所兼居間で頼まれていた伝票整理を終えた。それから階下にある店に顔を出すことにした。

呉服屋は大きな道路に面した四階建てのビルの一階にある。二階は倉庫と特別なお客様用の応接室、三階と四階が自宅で、居住スペース兼事務所になっている。

裏口から店の中を覗くと、ちょうどお得意様がいらしていて、父が接客をしているところだった。手前で反物をチエックしている兄を小声で呼んだ。

「どうした？ 雛子」

やってきた兄をお得意様から見えない奥に引き込む。

「兄様、わたし、もっとお仕事がしたいの。お店に出てもいい？」

わたしがそう言うと、とたんに兄が渋い顔をした。

兄の名は麻生一矢、歳は三十二歳。イケメンだとみんなは言うけれど、いまだ独身で、恋人がいるという話も聞いたことがない。

八つも歳が離れているせいも、小さな頃からわたしを本当に可愛がってくれた。宿題も一緒にしてくれたし、免許を取ってからは学校の送り迎えもしてくれた。

感謝はしているけれど、限度というものがある。両親もそこそこ過保護だと思っただけで、兄は確実にその上だ。兄はわたしが働くことすらよしとしない。

「店は駄目だ。この前お客様の前で反物にお茶をこぼしたのを忘れたのか？」

忘れてた。でもあれはちよっと手が滑っただけだ。

「なら別のことでいいわ。お使いとかない？」

「ない。それより伝票整理は終わったのか？ それが終わったなら今日はもういいよ」

兄はそう言うと、さっさと店に戻ってしまった。今日はもういいって、まだお昼過ぎなのに……すぐすぐと上に戻り、もう一度だけ伝票を確認してから、四階にある自分の部屋に帰った。

せっかく決意したのにこの様だ。情けなさ過ぎて涙も出てこない。むしろ腹立たしい。

悔しいから綾女に電話しよう。携帯電話（いわゆるガラケーというヤツだ）を取り出し、押し慣れた短縮番号を押すと、すぐに綾女の不機嫌そうな声がした。

『雛子、わたし仕事中なんだけど？』

「わたしはもう終わったの。もう終わったのっ。もう何もしなくていいって言われたの！」

『何度も言わなくてもわかったわよ。いつものことですよ』

綾女の呆れ声を聞いていたら、もっと腹が立つてきた。

「でも、わたしはもっちゃんとした仕事がしたいの。自立したいの。もう今のままじゃられないの。自分の人生は自分で決めたいの！」

『いきなりどうしたの？』

「今日決めたの」

『……わかった。合コンしよ』

「どうしてそうなるの？」

『雛子はまだやったことないでしょ？ 今日、六時に迎えに行くから。それまでに家を出る理由を考えておいて』

綾女はそう言うなりプツリと電話を切った。仕事の愚痴ぐちを言ったはずなのに、なぜに合コン？確かに言葉を知っているだけで、参加したことはない。

だけど、未知のことに挑戦するのも自立の一步かもしれない。二十四にもなつて自立なんて言葉を使う自分が情けないけれど、何もしいよりマシだ。よし、ならば早速用意をしなければ。

……果たして、何が必要なだろう？ 服装だつて、何を着ればいいのか？

わからないときは素直に聞こう。とは言え、今電話をしたら綾女にまた怒られそう。ならばとメールを送ることにした。

「何を着ていけばいいの？ 何を持っていけばいいの？」

メールを送って待つこと五分。綾女からの返事が届いた。

「何でもいい。手ぶらでいい」

「短っ」

あまりにも簡潔すぎる内容が綾女らしい。何でもいいと言われてもなあ。さすがに手ぶらでは出かけられないから、お財布と携帯とハンカチくらいは持った方がいい気がする。

服装も、普段かしくまってる出かけるときはほとんど着物だから、綾女が着るようなおしゃれなドレスや洋服は持っていない。さすがに着物を着ていくわけにもいかないし。まあ適当でいいか。下手

におしゃれしちゃうと兄様に怪しまれちゃうし……つて兄様!!

そうだ。ここで考えなきやならないのは、持ち物でも服装でもない。あの兄の存在だ。

わたしだつて、これまでずっとイイコで続けたわけじゃない。それなりに興味を持ちだした頃、子どもらしい嘘を並べて他愛ない冒険を試みたこともあったけれど、そのほぼ全部を兄に阻止されている。

多分嘘を並べるから悪いのだ。どうやら嘘をつけばつくほど顔に出るらしい。ならば嘘をつかなければいい。

思い立って階下に降り、店にいた兄を手招きした。

「今度は何だ？」

面倒くさそうな顔をした兄に内心ムカつきながら、とっておきの顔をする。小首を傾げ、背の高い兄を見上げ、目をパチパチさせるのだ。するとほら、兄の表情が少し緩む。

「綾女から夕飯を一緒に食べようって誘われたの。行ってもいい？」

内容は間違っていないから嘘ではない。

「……綾女さんが迎えに来てくれるのか？ どこに行くんだ？」

「六時に来るって。場所は知らない」

素直に答えると、少し考えるような表情をした後、兄が頷いた。その通りなんだから、これも嘘じゃない。

「わかった。どこに行くのか決まったら連絡しろよ」

「はい。じゃあお父様とお母様にも言っておいてね」

お願いをしてまた自分の部屋に戻る。約束の時間はまだまだ先だ。準備も何もないから暇で仕方がない。とりあえずベッドに寝転がってみる。

……今、自分がものすごくダメ人間になった気がした。お天気のいい平日に、何もすることなく部屋でゴロゴロ。こんな怠惰な二十四歳が世間にどのくらいいるのか。

仕事と言える仕事もせず、なのに、それなりの“お給料”はもらっている。それがものすごく恵まれた環境だということもわかっているし、両親や兄に感謝もしている。でも、このままでは本当にダメな人間になってしまう。

自分の人生を自分で切り開く。そう決めただけで、実際にどうすればいいのか具体案がまるで出ない。学校ではそんなこと教えてくれなかった。

いかに清く正しく美しい女性になるか、そんなことばかりだった。『マリアさまのこころ』の歌が全部歌えても、今のところまったく役に立っていない。

ふいにあの青い瞳の男性のことを思い出した。どこかでまた会えるかしら。もし出会えたら、今度はちゃんとお礼を言わなければ。

そう言えば、一言も彼の声を聞かなかったことも思い出した。いったいどんな声をしているんだろう。ほとんど見えず知らずの男性なのに、知りたくてたまらなかった。こんな気持ちは初めてだ。

急にやりたいことが増えてきたわ。きつとこれはいい兆候だ。さようなら、自堕落なわたし！  
……ハッ！ ガバツと起き上がって時計を見ると、すでに五時を過ぎたところだった。考え事を

しながら夢も見ずに何時間も寝てしまうなんて、わたしってバカ過ぎる。

洗面所で顔を洗い、寝乱れた髪を梳かした。軽くお化粧をして、しわくちやになった服を着替える。半袖のカットソーとスカート、それからカーディガン。七月に入って気温も上がっているけれど、素肌を出すのは苦手なので一年中手放せない。わたしの定番の格好だ。

約束の十五分前には用意を終え、三階の居間に降りたら待ち構えていたように兄がいた。わたしの格好を頭からつま先まで見て、うんと頷く。

いつもの格好だから、怪しまれてはいないはず。内心ちよつとドキドキしながら、居間のソファに座って綾女が来るのを静かに待った。

自宅の玄関のインターホンが鳴ったのは六時を五分ほど過ぎた頃だ。立ち上がったわたしを制し、兄が応対に出た。そしてしばらくして、綾女が現れた。

仕事帰りに直接来たのか、彼女にしては地味なスーツ姿だった。これでドレス姿だったら、久しぶりに綾女に飛び蹴りをしたかもしれない。

——一時期女子プロレスにはまった綾女と、学校の体育館で練習したことがあるのだ。もちろんシスターに見つかって、当然のように罰を受けた——

心の中でホツとしていたわたしに、綾女が笑いかけた。

「お待たせ、雛子。それでは一矢お兄様、しばらくの間、雛子をお預かりしますわね」

綾女が微笑むと、兄の片眉が微かに上がった。いぶかしんでいる顔だ。かなりドキドキしながら、綾女と連れ立って家を出た。

「あのお兄様の困った顔、見た？」

綾女がクスクス笑いつつ、さっさと歩き出す。わたしは急いで彼女に続いた。

「歩いて行くの？」

「自分の家がどこにあるか知らないの？ 少し行けば東京一の繁華街じゃない」

なるほどと思いつながら、綾女と並んで歩く。家のまわりには大きな商業施設がたくさんある。最近もひとつできたばかりだ。連日大勢の人が店の前を通ってそこに行っていることは知っていたけれど、自分が行ったことはないのだ。

家から十分ほど歩いた場所にある大きなショッピングビル。その中のイタリア料理の店に綾女が入った。続いて入ると、綾女は慣れた様子で店の奥に進んだ。そこは少し個室っぽくなっていて、すでに男性が三人座っていた。

綾女とわたしを見て、その三人が立ち上がる。パリッとしたスーツ姿の彼らは、綾女から弁護士の卵だと紹介された。三人とも爽やかで、いわゆる好青年だけれど、なよなよしているように見えて、あの青い目の男性とは正反対な感じがした。

おお、これが合コンというものなのか。それにしてもどこで知り合うんだろうと内心思っていると、綾女がわたしを彼らに紹介した。

「麻生雛子よ。わたしと同じ聖女出身なの。正真正銘のお姫様なんだから、粗相のないようにね」  
わざと茶化しながらそう言うと、彼らは感心したように頷いた。

いつの間にか頼んであったらしく、料理が運ばれてくる。綾女たちはお酒を頼んだけれど、わた

しは飲めない……というより飲んだことがないのでお茶だ。

ここで無理やり飲むと確実に兄にばれるので、勧めようとする彼らを綾女がたしなめてくれた。

「聖女って秘密の花園なんて言われて謎が多いけど、実際はどうなの？ 部活とかあるの？」

食事をしながら、彼らの一人が言った。

「ああ、茶道部とかありそうだよ。麻生さんは何部？」

おもしろがるように、他の男性も言った。ちらりと綾女を見るとニヤニヤ笑っている。

「部活動というものはありませんでしたので、わたしと綾女は同好会を作りました」

正直に話すと、彼らはへえと声を上げた。

「どんな？」

「えっと、女子プロレスと野球です」

「……へ、へえ」

「でもどちらも部員が集まらないし、練習場所もないしで。野球は運動場の端でバッティング練習をしていたら、ボールがシスターの宿舍の部屋の窓を割ってしまっ……」

あのときもシスターからこんこんとお説教をされたっけ。

「結局、二人で放課後にバッティングセンターに通い詰めて、それだけはずまくったのよね」

綾女が後を引き継いで言った。

「……な、なんか聖女のイメージと違うね」

乾いた笑いが響いたそのとき、

「イメージが違うなら、そろそろお開きでいいんじゃないか？」

よく知った冷たい声が、わたしの頭の上から聞こえた。恐ろしさを覚えながら見上げると、案の定、兄が怖い顔をして立っていた。

「に、兄様っ」

「もう食べ終わったんだろ、帰るぞ、二人とも」

兄に睨まれてしまったら、従うしかない。さすがの綾女も肩をすくめただけだった。

結局ポカンとしている三人に謝り、兄に引きずられるようにして店を出た。

「ど、どうしてわかったの？ 兄様」

さっさと前を歩く兄を追いかけながらそう尋ねると、綾女がクスクスと笑って言った。

「あら、雛子知らなかったの？ 雛子の持つてる携帯ってGPSが内蔵されているのよ」

「……GPS？」

「つまり、どこにいてもわかるってこと。ちなみに雛子の携帯は、お年寄り用の機種よ」

お年寄り用……どうりでボタンが大きくて使いやすいと――

「兄様っ、酷いっ」

兄からこの携帯をもらったのは大学卒業のときだった。卒業祝いですごく嬉しかったのに!!

怒っているわたしをまるつきり無視して、兄は無言のまま歩いている。でも、この大型ビルの中にはたくさんお店があるのに、GPSってそこまでわかるものなの？ 疑問をそのまま口に出すと、ようやく兄が口を開いた。

「雛子、忘れたのか？ 俺は今年度の商店街会長だ。この界限かいげんにいる以上、どこにいても情報はすぐに入ってくるんだ」

……二度と町内で合コンをするのはやめよう。

それより、綾女が兄が来たことに驚いていないなんて驚きだ。わたしの携帯にGPSが内蔵されていることも知っていた。ということはつまり……綾女はこうなることを最初からわかっていたってこと!?

綾女をジロリと睨むと、すべてを察しているような顔で笑った。

不貞腐ふてくされたわたしと、妙に楽しげな綾女と、怒っている兄と、三人で自宅に戻った。店の裏側にある自宅の玄関先で綾女が立ち止まる。

「綾女さんを送ってくるから、雛子は先に上がれ。戻ったら説教だから、まだ寝るなよ」

上着のポケットから車のキーを出しながら、怖い顔のまま兄が言った。

ああ、今日はこのまま何事もなく終わると思っていたのに。

「じゃあまたね、雛子」

苦笑いを浮かべる綾女に手を振り、玄関の扉を開けた。しょんぼりしながら内階段を三階まで上がり、居間を覗くと父と母がソファに並んで座っていた。

「ただいま」

声を掛けると二人が同時に振り返る。

「おかえりなさい、雛子。あら、一矢さんは？」

「綾女を送ってくるって」

「そう。早くお風呂に入っちゃいなさいね」

のんびりしている両親の様子だと、合コンのことは知らないらしい。両親はわたしが学院で起こした騒動の数々を聞いても、あまり動じなかった。

母も聖女出身で、学院の中は絶対的に安心だと思っていた節もある。基本的にわたし自身に重大な危険が及ばなければいいようだ。

でも学院外では結構厳しいのだ。綾女は幼稚園からの付き合いだし、親同士の仲もいいので、彼女に関しては規制は緩い。私的には綾女が一番危険な存在だと思うのだけど、今のわたしの唯一の自由への扉的存在なので、余計なことはいわないでおこう。

一旦自室に戻ってからお風呂の支度をして、さっさと入った。たつぷり温まって、髪を乾かしながらお風呂場を出たら、兄が仁王立ちで目の前にいた。温まったからだがみるみる冷えていく感覚に陥る。

それからたつぷり二時間、自室で正座をした状態で、こんこんとお説教をされた。内容は如何に男が悪い生き物であるかとか、そんな話だ。

兄様ってシスターより男性観が厳しいと思う。自分はどのなのさと思うけど、口ごたえをしたら正座の時間がさらに延びるのがわかっていたので、神妙な顔を保ってひたすらごめんなさいをくり返した。

3

綾女から次の連絡があったのは、数日後のことだった。

「今度の日曜日、Wデートしましょ。十時に駅で」

メールに書いてあった文章はそれだけだった。相変わらず一方的だ。それでも、Wデートという単語に心が躍る。だって、これまでデートなんてしたことないのだから。

今度こそ邪魔をされてなるものかと、当日は携帯を忘れたフリをして置いていき、服装も普段着のまま、綾女と出かけるとだけ告げて家を出た。これで兄に途中乱入されることはないだろう。

ウキウキと駅に向かうと、ロータリーに真っ白なスポーツカーが停まっていた。綾女の手だ。彼女はいつの間にかちゃっかり運転免許を取っていた。どうせなら一緒にと誘ってくればよかったのに。そう言ったら、

「だって雛子には無理でしょ」

「お前には無理だ」

って、綾女と兄が同時に言ったのだ！

失礼しちゃうと怒ったら、近くの小さな遊園地でゴーカートに乗せられた。その運転がまったく思い通りに動かなくて、イライラしていたら、二人にほらねって顔をされた。

思い出してムカムカしながら車に近寄ると、窓が開いて綾女が顔を出した。

「時間通りね。乗って。現地集合にしたから」

助手席のドアをあけ、乗り込んでからシートベルトをしめる。

「Wデートって誰と？ この前の人？」

車を走らせた綾女に尋ねると、彼女が肩をすくめた。

「わたしのお見合い相手。と、その友達」

「……ええっつ!!」

思わず座席で飛び上がったわたしに、綾女が視線だけをよこした。

「見合い話なんて、雛子だって何度もあったでしょ。わたしだって同じよ。今回も断ったけど、向こうが一度会うだけでもってうるさいから、友達を連れて行くことを条件にしたの」

半ば怒ったようにそう言うと、さらにアクセルを踏み込んだ。

綾女もわたしと同じく、政略結婚には否定的だ。今のところ、彼女の両親もそれを強要はしていない。ただ、申込みはひっきりなしにあるようだ。

「嫌なのはわかるけど、わたしを巻き込むことないじゃない」

せっかく初めてのデートだって舞い上がったのに。なんてことはない、綾女の付き添いだなんて。テンションが一気に下がったわたしを横目で見て、綾女が笑った。

「相応の友達を連れてくるように言っているから、意外と雛子好みの王子様が来るかもしれないわよ」

……王子様。その言葉にいつかの彼を思い出した。彼は、王子様というよりも騎士って感じだったけれど。

もしこれから出会う綾女のお見合い相手の友人が、あの方ならいいのに。

そうよ、小さい頃から十何年もずーっと神様にお祈りしてきたんだもの。そろそろこの辺で願いのひとつくらい叶えてくれるはず！ と勢い込んで行っちゃたけれど……

——まあ人生は、そんなに都合良くいかない。

綾女と一緒に、待ち合わせの大きな公園の中にあるカフェに入って、件の友人を紹介された。妙に気障きざやったらしいその人は、夢見ていた彼とは掛け離れていた。頭の中で大きなため息をつく。

それは綾女のお見合い相手も同じだった。わたしたちと同じ年で、とある企業の子息だとそれぞれ自己紹介されたけれど、名前は一瞬で忘れた。きつと綾女もそうだろう。明らかにつまらなさそうな綾女をお相手がせっせとなだめているとき、気障な友人がわたしを店の外に誘った。

「一応彼らのお見合いなんだし」

その言い分もわからなくはない。なので、渋る綾女をその場に残し、気障な彼と外に出た。

初夏の休日、大きな公園の中には緑の芝生が広がっている。博物館や動物園もあるので、親子連れがたくさんいた。気障きざや男くんは遠くに行こうと言うけれど、綾女とあまり離れたくなかったので、カフェから見える、屋台が並ぶ通りを歩いた。

気障男くんが一生懸命何かを言っているけど、さっぱり頭に入っていない。

まず、親兄弟以外の男性と行動を共にしたことがほばないから、思った以上に緊張した。なので、何を話せばいいかわからなくて言葉が出てこない。気障男くんが徐々にイライラしてきたのも伝

わってきたけれど、自分ではどうしようもなかった。

ない知恵を振り絞って、屋台で売っていた珍しい色のジュースを買ってもらった。木陰に置かれたテーブルに着くと、カフェの中にいる綾女の姿がかるうじて見える。

気障男くんがカラフルなジュースをじっと見つめ、そして顔を響めた。口をつけることは諦めたようだ。そんな変な味じゃないと思うけど、とストローに口をつけてみた。人工的な甘さが口の中に広がる。

……うん、なかなかおもしろい味だ。

「そういえば、雛子さんってあの麻生呉服店の娘さんなんだって？ 確かビルもたくさん持っていたよね？」

おもむろに気障男くんが言った。ジュースに若干夢中になっていたわたしは、言っている意味がわからずストローをくわえたまま顔を上げた。

「不動産関係はお父さんが管理してるの？」

なぜここでわたしの実家の話になるのだろう。確かに、我が家は自宅兼呉服屋の他にいくつか不動産がある。でも、わたしは詳しいことは知らないので答えようがなかった。

「さあ。わたしは詳しくは存じませんので」

ジュースを持ったまま答えると、気障男くんがふーんと意味ありげに答えた。

「雛子さんは、まだ決まった相手はいないんだよね？」

気障男くんの顔がふいに近づいてきた。嫌な予感を覚えながら少し身を引くと、案の定、彼はさ

らに近寄ってきた。

「綾女さんと俺の友人が結婚して、君と俺が結婚したら、おもしろくない？」

「……いえ、おもしろくはないと思いますけれど」

悪寒と嫌悪感が顔に出ないように気をつけながら、また少し距離を取る。

「そう言わず、考えてくれてもいいじゃない？」

気障男くんが手を伸ばしてきた。反射的に払いのけようとしたら、手に持っていたカラフルなジュースが気障男くんの脚の上に落ち、白っぽいズボンが、ジュースで斑に染まった。

「冷てーっ。どうしてくれるんだよ、買ったばかりなのに！」

大声を上げて気障男くんが立ち上がった。まわりにいた人たちもギョツとした目でこちらを見る。わたしも思わず立ち上がる。

「ご、ごめんさい」

鞆からハンカチを出そうとしたけれど、なかなか出てこない。

「……こういうときは弁償だろ」

「えっ？」

顔を上げると、気障男くんが怒った目で見ていた。弁償？ そうか弁償か。それってお金ってことよね。お財布を出すために鞆を探ったそのとき、背後に気配を感じた。

「嫌がっている女性に気がつかない君の方に、非があるんじゃないのか？」

低い声が頭の上の方から聞こえた。目の前にいる気障男くんが啞然とした顔でわたしのの上の方を



見ている。

釣られて見上げると……そこにいたのは、あのときの男性だった。

その瞬間、目の前がキラキラと煌めき出した。効果音すら聞こえるようだ。まるで後光が差ししているかのように、まぶしく見える。

お日様に照らされた髪は、灰色と言うより銀色に近い。そして瞳は、わたしの頭の中にずっとあつた、海の青だ。青い瞳に銀の髪。まるで物語に出てくる王子様……のようだけど、彼はやっぱり騎士に見えた。

彼が静かに動いてわたしの前に立った。広い背中に阻まれて、気障男くんが見えなくなる。彼はすらりとしているけれど、背が高く体格がとてもしいい。だから、騎士のように思うのかしら？

わたしが考えていると、彼が身を屈めるような動きをした後、しばらくして何やらうめき声が聞こえた。

彼の背中から前を覗こうと顔を動かしたと同時に、気障男くんが走り出し、あつという間に見えなくなつた。前と同じ光景だ。

……これは、また助けられたのだろうか。

背中を向けていた彼が振り返つた。あの青い目がわたしを見下ろしている。じっと見つめられると、ますます胸がドキドキしてきた。からだ中の血液が顔に集まっているのかと思うくらい、頬がかつと熱くなる。

「あ、あなたはあのときの方ですよ？ あの、先月の結婚式の。重ね重ねありがとうございます

ます」

深く頭を下げ顔を上げると、彼が不思議なものを見るような目で見ていた。言葉がわからないのかしら？ でもさつき流暢な日本語を話していたから、違うわよね。わたしの恥ずかしい場面ばかり見られているからかしら。

「あ、あの。わたし、麻生雛子と申します。あなたのお名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」  
鞆かばんを握りしめながら思い切つて聞いたが、それでも彼は黙つたままだつた。やっぱり通じていないのかしら？ 不安に駆られ始めたそのとき、

「ルカ」

彼が一言そう言った。

「……ルカ、様？」

尋ねると、彼が頷いた。なんて素敵なお名前。屈強な騎士のように見えるのに、お名前は、日本だとまるで女性のようだ。

「あのつ、ルカ様。何かお礼をさせてください。一度ならず二度までも助けていただいたのに……」

あのカラフルなジュースをご馳走するのは失礼だろうか。ならば綾女がいるカフェに戻つて……色々と考えていたわたしの目の前に、突然彼の顔がアップになった。

そのとき、まわりの景色が一変した。そこにはわたしたち以外誰もいなくて、ただまばゆい光に包まれているような、不思議な感覚に陥る。

青い目が間近に見える。こんなに近くに男性の顔があるのに、嫌悪感すら感じない。さらに速く

なる胸の鼓動を不思議に思っていると、わたしの肩に彼の大きな手が乗った。その目がさらに近づく。

「礼ならこれで」

唇息がかかる。驚くよりも前に、わたしの唇に彼のそれが重なっていた。触れるだけの短いキス。生まれて初めてのそれは、まるで柔らかなマシユマロに触れるかのようだった。

わたしが呆然と目を見開いている間に、彼は静かに離れ、そして去って行く。

自分の中の変化に気がついたのは、そのときだ。

ずっとわたしのまわりを取り囲んでいた、いばら。それが、みるみる枯れていくのが見えた気がしたので。

「雛子、大丈夫!？」

カフェから綾女が走って来るのが見えた。心配そうなその顔が、彼女が一部始終を見ていたことを物語っている。

「雛子!？」

目の前まで来た綾女に声を掛けられる。まだ呆然としていたけれど、わたしにはわかった。

物語のいばら姫は王子様のキスで百年の眠りから目覚めた。そしてわたしは、たった今、あの銀色の騎士のキスで目覚めたのだ。

「綾女、わたし、今本当に目覚めたみたい」

心配そうな彼女の目を見て、はつきりとそう言った。

綾女は、慌てるお見合い相手をその場に残し、わたしの手を引いてさっさと自分の車に乗り込んだ。

帰る道すがら、お昼ご飯を食べるために彼女の行きつけの店に入り、食事中は当然のように質問の嵐だったけれど、わたしも答えられる限り答えた。

つまり、先ほどの銀髪の彼……ルカ様とは二回目の出会いだったこと。そのどちらも、危ういところを助けていただいたこと。そして、さっきのキスで、わたしのまわりのいばらが消えたこと。

どうしてなのか、具体的な理由を説明できない。でも確かに、わたしは自由になった気がしたのだ。自分でも理由がわからないのに、綾女はその答えを知っているようだ。

「雛子にもようやく春が来たのね」

訳知り顔でそう言った。

まるで背中に羽が生えたようだった。綾女に家まで送ってもらう間も、車を降りて自宅に入り、階段を上る間も。

今にも踊り出しそうなほど気分がよく、そして何もかもがクリアで新鮮に見えた。部屋の前で仁王立ちしていた兄を見るまでは。

「に、兄様？ た、ただいま」

楽しかった気分が一瞬で消えた。夏なのに、背すじが凍るとはこういうことを言うのだろうか。

兄は何も言わず、まるで印籠いんろうを出すかのように、わたしの携帯電話を突き出した。

「忘れたのか、持って行かなかったのか？」

「……わ、忘れたのよ、もちろん。ごめんなさい」

兄の横を通り抜け部屋に入ろうとしたわたしの腕を、兄が掴んで引き止めた。

「綾女さんは今日、見合いだったらしいな。ご両親に聞いたぞ」

……絶体絶命とはこのことか。

この前のように、また部屋の中で正座をさせられ、兄からこんこんと説教をされた。聞けば綾女のお父様から電話があり、今日の一連のことを謝罪されたそうだ。

つまり、綾女のお見合いにわたしを巻き込んで、とんだ騒動に発展したことを。当然だけど綾女には密かに護衛がついていて、わたしのこともばっちり見られていたらしい。

お見合いの方とそのお友達は、京極側が責任を持って対処しますということだった。綾女のお父様はわたしにはお優しい方だけど、大企業のトップに立っているだけあって大変厳しい一面を持っている。あの気障男<sup>きざお</sup>くんのことを考えると若干可哀想な気にもなる。

ただ、不思議なことに、ルカ様のことにに関して、兄は何も言わなかった。ルカ様のことは報告されていらないのだろうか。それはそれでラッキーだけれど。

ほとんど見ず知らずの方にキスをされたなんて聞いたら、兄も両親も卒倒しそうだ。

「いいか、雛子。お前ははつきりと知らないと思うが、我が家にはそれなりの財産がある。下品な輩<sup>やま</sup>はそれを目当てにお前に言い寄ることもあるだろう。雛子はそれをもっと自覚しろ」

これまでわたしに来たお見合い話の中には、そんな方もいたらしい。でも、それが政略結婚とい

うものだ。

だけどわたし自身じゃなく、麻生家の財産や聖女出身という肩書きだけで判断されるなんて屈辱だ。やっぱりわたしは、そんな生き方はできない。改めてそう思った。

結局わたしには隙があり過ぎるのだと兄が言い、しばらくの外出禁止令を出されてしまった。

元々出不精だし、仕事だつて家の中でしかしていないのだから、わたしにとって外出禁止なんて痛くも痒くもないのだよ、兄様。

なんてことは口にも顔にも出さず、兄の説教からさっさと解放されるべく、わたしは神妙に頷いた。

ペンを手に居間のテーブルにつき、目の前に積まれた封筒の束を見てため息をつく。今日の仕事は、展示会の招待状の宛名書きだった。

外出禁止を言い渡されて三日目。毎日これをやっている。こんなのパソコンでちゃっちゃと印刷しちゃえばすぐなのに、手書きにこだわっているのは兄だ。困ったことに料理も裁縫<sup>ざいほう</sup>もダメだけど、書道は昔から得意だった。学院で唯一褒められた教科だ。

お得意様の住所が書かれている一覧表を見ながら、一通ずつ丁寧に書いてはリストを消していく。単純作業だけど結構集中力がある。

この三日間、ひたすら作業が続けるのにそれほど進んでなくて、兄がイラついている。でも少しでも気を抜くと、頭の中にルカ様の顔が浮かぶのだから仕方がない。

青い瞳と銀色の髪。どこの国のお方かしら？ よくよく思い起こすと少し日本人の面影も感じる。ハーフ……いえ、今はダブルと言うのだったかしら。もしかしたらそんなのかもしれない。

わたしに初めてキスをしてくれた方。いばらの中から連れ出してくれた方。そう考えるだけで、ペンを持つ手が止まってしまふ。

けれど、わたしが知っているのは「ルカ」というお名前だけ。どこで会えるのかもわからない。これまでの二度とも、出会えたことは偶然に過ぎないのだから。

二度あることは三度ある。でも、もう二度と会えない可能性もある。そう思うだけで泣けてきそうだ。

ペンを置いて何度目かのため息をついたとき、兄が顔を覗かせた。そしてテーブルの上のほとんど進んでない宛名書きにちらりと視線を投げる。

「雛子、ちよっとお使いに行ってくるか？」

「外出禁止じゃなかったの？」

わたしが尋ねると、兄が少し困った顔をした。

「相当反省してるみたいだしな。遠山とよやまさんにこの書類を渡してきてくれ」

そう言っただけで茶封筒をテーブルに置くと、また店に戻っていった。どうやら、遅々として進まない作業の理由が家から出られないことだと思っっているらしい。

兄様もわかってないわね、と思いつつ、やっぱり外には出たいとも思う。だって家にずっといると、ルカ様のことばかり考えてしまうんだもの。それはそれで自分にとっては新鮮だけど、同時

に悪いことも考えてしまうから。

椅子から立ち上がり、兄が置いていった封筒を手にとった。遠山さんはご近所でバッティングセンターをしていて——昔、綾女と通いつめたところだ——、今年度の商店街の副会長さんだ。

封筒を持って、素足にサンダルで外に出た。表通りはいわゆるおしゃれ通りだけど、裏通りは昔ながらの町並みが続く。慣れた細い道をぶらぶらと五分ほど歩くと、こぢんまりとしたバッティングセンターがあった。

「こんにちはー」

少し古びた入り口を入ると、遠山のおじさんが椅子に座って新聞を読んでいた。

「おお、雛子ちゃんいらっしやい」

「はい、これ頼まれ物です」

兄から預かった封筒を渡す。

「ありがとうございます。今、謹慎中なんだって？」

遠山のおじさんがからかうように言った。本当にこの界限かきいでは隠し事はできないようだ。

「そうなの。何も悪いことなんてしてないのに」

かつて知ったるなんとやらで空いている椅子に座ると、おじさんが冷たい麦茶を出してくれた。

「兄さんも心配なんだよ。それより暇ならちよっと打っていくかい？ サービスするよ」

そう言っただけで、バッティング場の方に顔を向けた。三つの打席には誰もいない。そう言えば、最近全然打ってなかったっけ。昔から気分転換にはここが一番だし……

「じゃあお言葉に甘えて。でもお代は兄様に請求してくださいね」

ケラケラと笑うおじさんの声を聞きながら、バットを持って一番お気に入りの真ん中の打席に入る。

「いつものでいいかい？」

わたしが頷くと、おじさんが代わりに機械を操作してくれた。百三十キロのストレートを五十球色々試して、これがわたしにとって一番いい設定だ。

開始の音と共に、まっすぐに飛んできた白いボール。タイミングを合わせてバットを振ると、小気味いい音と程よい振動が同時にからだに伝わる。

ボールは大きな弧を描いて、バックネットに貼り付けてある、“ホームラン”と書かれたパネルに当たって落ちた。続くボールもすべて同じ場所に当たる。

「雛子ちゃん、今日も絶好調だね」

おじさんは笑ってそう言うのと、また新聞を読みに戻った。

何度もバットを振っていると、頭の中にルカ様の顔が浮かんだ。これからどうしたらいいんだろう。こんな気持ちを知ってしまったら、もうこれまでのようにはいられない。

いばら姫なんていつまでも言われたくない。もう眠って待つだけのお姫様ではないのだから。百年の眠りから目覚めたお姫様は、王子様と速攻結婚したけれど、今の自分ではそれは無理。だって彼にどこでいつ会えるのかもわからないのだから。

生まれて初めて現れた、どうしても手に入れないもの……人だけど。考えてもわからないなら、

行動しかない。

思いっきりフルスイングして、白いボールがホームランパネルに吸い込まれるように飛んでいく様子を目で追った。

4

行動を起こそうと決めてから早一ヶ月以上。季節は真夏を過ぎ、秋の気配を感じ始めた。

季節は変わっても、ルカ様のことに關して何も進んでいないことに、あるときはたと気がついたが、よくよく考えてみれば、ルカ様の情報がまったくない状態では、動きようがない。その事実によりやく思い至り、至極当たり前のことなのに、勢い込んでいた自分がとても恥ずかしく思えた。その頃、家業がとても忙しくなった。わたしですら連日たくさんさんの仕事を任せられ、時間は刻々と過ぎていく。そんな現実にも焦りを覚えながらも、どうしたらよいかわからない。

数年に一度の大きな呉服展示会が間際に迫っていて、余裕のない兄に日々こき使われていた。もっと仕事したいと散々言ってきた手前、サボるわけにもいかない。本当に何もかもうまくはいかないものだ。

ただ、ルカ様のことは頭から離れない。次にいつどこで会えるかわからないから、様々なシチュエーションを妄想している。

例えば、信号待ちで偶然反対側にいる、とか。踏み切りで電車が通り過ぎたらいた、とか。駅の反対側のホームに立っている、とか。買い物帰り、落としたオレンジを拾ってくれた、とか。

自分の想像力のなさにうんざりするけど、事実、ほぼ家から出ないので、行動範囲が限られているし、ルカ様の情報がまったくないのだから仕方がない。

もっとドラマティックな再会はないかしら？ 仮面舞踏会で偶然出会うとか。いえ、仮面舞踏会なんて行ったこともないけど。というか、現実にあるのかしら？ でも、タキシード姿のルカ様とドレス姿の自分がワルツを踊る場面を想像してみたけど、王子様とお姫様みたいで悪くない。そんなくならない想像をしながら、日々仕事にいそしんでいた。

展示会は全国の呉服屋とその顧客が集まる。各店舗がこれぞと思う品物を三日間にわたって展示するのだ。ものすごく高価な着物や大きな宝石を埋め込んだ帯留めなども飾られるため、警備はかなり厳重になるらしい。

その展示会を明日に控え、今日は家族総出で出品の準備に朝から大わらわだ。

「雛子、明日はこれを着なさいな」

母が華やかな大振袖を持って来た。以前結婚式で着たものによく似ている、赤い着物。

「まさしく看板娘の装いにぴったりじゃないか」

父が嬉しそうな声で言った。母が着物を専用ハンガーにかける。それに合う帯や小物を、わたしも一緒に選び始めた。

その向こうでは兄がノートを手に黙々と反物を箱に詰めている。キャツキャしている両親とは対

照的で、ちょっと可哀想になってきた。なんだかんだいっても、真面目な愛すべき兄なのだ。

「兄様、手伝わ」

近寄ってそう言うと、小物の一覧が書かれたリストを渡された。リストに沿って、髪飾りや扇子、バッグに草履といった品を揃えていく。

そう言えば、わたしのお気に入りのかんざしは失くしてしまったんだっけ。あの日、結婚式から帰ってきたときにないことに気づいて、兄の車の中やバッグの中も散々探したけれど見つからなかった。そんなに高価なものじゃないけれど、ちりめんの花がちりばめられた一点ものだったのに。リストの品をすべて揃え、箱詰めを終えたのは午後遅くなったことだ。父と兄はそれらを車に載せて、搬入してくると出かけた。

「さあ、雛子は明日のために今日は早く寝なさいね」

母に促されて食事を終え、お風呂に入ってから自分の部屋に戻る。

言われた通りさつさと寝たら、いつもより早起きなのにすつきりと目が覚めた。顔を洗って居間に降りると、すでに両親と兄が揃っていた。

そして、いつも着付けとヘアメイクを手伝っていただく本城静という名の、男性……もいらしている。彼を「男性」とはすんなり呼べないのは、彼がとても女性らしいからだ。

「まあ、静様。おはようございます」

「おはよう、雛子姫。相変わらずお人形さんみたいね」

静様は華やかに微笑まれた。

「さあさあ雛子。早く朝ご飯を食べなさい」

母に言われるがまま、ダイニングテーブルの上に置かれているおにぎりを食べる。とうに朝食を終えたらしい母は、静様と続き部屋の和室に行き、着物や小物をチェックしていた。ふすまがスツと閉まる。先に母が着付けをすることにしようだ。

基本的な着付けは母もわたしもできるけれど、特別な日や凝った帯を結びたいときは静様をお願いしている。静様は見かけはとてもハンサムで少し派手なお方だけれど、腕も評判も大変いいブローのヘアメイクアーティストさんだ。ちなみに兄の同級生でもあるので、小さな頃からの知り合いだった。

昔はあんなじゃなかったのになあ。もうちよつと普通の男の人に見えたけれど。隣の部屋から聞こえる、はしゃぐ母と静様の声をBGMに、おにぎりを頬張った。

朝食を終えて、改めて歯磨きをしないと、母の支度がちょうど終わったところだった。静様と入れ替わりに和室に入り、着物の下着を身に着ける。長襦袢<sup>ながじゆばん</sup>まで着たところで静様が戻ってきた。

「先にヘアメイクね」

静様が自分の大きなメイクバッグからケープを取り出した。姿見の前で椅子に座ると、そのケープがかけられた。静様がピンで前髪を上げると顔があらわになる。

「相変わらず色白ね。なるべく塗らないでおきましょう」

静様の手が頬に触れた。

——彼は、わたしの中では男性の部類に入っていないので気にならない。

宣言通りメイクはさつさと終わり、長い髪を編み込むのは時間がかかった。それでも慣れた手つきで静様が髪を結い上げる。

ヘアメイクが終わると、立ち上がって今度は肩から大振袖がかけられた。静様がテキパキと着物の襟を合わせ、着丈を合わせ、腰ひもを縛る。手早く、そしてキレイにお端折<sup>はたせ</sup>りを整え伊達締<sup>だてぢめ</sup>めをしめる。その息苦しさは一瞬ウツと声が出ると、かがんでいた静様が顔を上げた。

「今日は一日中着ることになるから、いつもよりは緩くしてるわ。我慢なさい」

続く帯はさらに重く苦しい。

「今日は花結びにしましょうか？」

静様が横で見ている母に声を掛けた。

「そうね。今日は華やかで目立つ方がいいわ」

母が頷き、静様は楽しそうにあれこれ話しながら器用に帯を締めていく。深呼吸をくり返しつつ、ひたすら耐えるのがわたしの役目だ。

結局すべてが終わるまで一時間はかかった。大きいため息をついたわたしを見て、静様が笑う。

「これも呉服屋の娘に生まれた宿命よ。頑張ってらっしゃいな」

姿見に映った、振袖姿の自分を改めて見る。

まるでこれから成人式に行くかのような格好だ。もちろんその宣伝も兼ねているので当然なのだけど。

この格好で今日一日を過ごすのかと思うと正直うんざりする。初秋とはいえまだまだ暑いのだか

ら。三日間行くのなら、明日は細の着物が着たいわ、なんて思いながら、静様にお礼を言って見送り、家族で展示会場に向かった。

海の近くにある巨大な建物。その広大なフロアの半分ほどを使って展示会が開かれる。会場にはすでに大勢の人がいるけれど、一般のお客様はまだ入っていないらしい。兄から案内図なるものもらい、それを見ながら我が家のブースに向かう。

会場の中心部分には高価な着物や帯留め、髪飾りなどがある特別展示場があり、そのまわりには大勢の警備員がいるのが見えた。そのことを隣を歩く兄に言うと、

「制服だけじゃない。私服の警備員も大勢いるらしいぞ。人もこれから多くなるから、迷子になるなよ」

と、なぜか釘を刺されてしまった。

半ば腐てくされながら兄について歩き、ようやく麻生呉服店のブースに到着した。搬入と展示は前日に父と兄が終わらせているし、接客も両親と兄がメインでやる。だからわたしは、ここにただいて、多少の説明をするだけだ。

まわりを見ると、同じような年頃の女の子はみんな振袖姿だった。成人式の着物を目当てに来るお客様も大勢いるので、値段も高価なものから比較的安価なものまで揃っている。

開場時間になり、入り口から大勢の人が入ってくるのが見えた。業者の方から一般の個人客まで様々だ。先ほど目にした特別展示場は今回の目玉ということで、すでに人だかりができています。

後でわたしも見に行ってみようと思いつつ、次々とやってくるお客様への商品説明を拙いながらも頑張ることにした。

我が家で扱っている商品は一点ものを中心だ。結構値が張るのだけれど、品質の良さや兄の営業のお陰でそこそこ繁盛している。それはそれで嬉しいけれど、二時間ほどするとすっかり疲れてしまった。

「兄様、少し休憩していい？ わたしも色々見たいし」

嘘くさい困った顔で言ってみると、兄はそれもそうだと頷いた。迷子にならないようにとだけ注意を受け、会場の案内図を手にブースを出る。

さて、どこに行こう。振袖に草履なので、当然ながらスタスタ歩けるものではない。案内図を見ながら、とりあえずブラブラと歩く。

各ブースはそれぞれに個性があつておもしろかった。ヘアアクセサリーの専門ブースで見つけた、トンボ玉を使ったかんざしが可愛かったけど、あいにく持ち合わせがない。残念に思いながら、さらにぶらついていると、会場の端まで来てしまった。

どうしてかしら？ 中央の特別展示に行こうと思っていたのに。

案内図を見ても、今の自分の位置がよくわからない。目の前には通用口があつた。一旦外に出た方が早いだろうか？ そう思いながらその扉に近づき、ドアノブを掴んだそのとき――

「そこに入るな」

低い声が背後から聞こえた。聞き覚えのある声だ。そう思ったとたん、胸が高鳴る。期待と驚き



と共に振り返ると、やはりそこに彼がいた。

「……まあ、ルカ様！」

海のような青い瞳と銀の髪。そして真っ黒なスーツ姿。思い返せば、彼はいつも黒いスーツ姿だった。

青い瞳に見つめられると、知らずに頬が赤くなる。ふわふわと宙に浮かぶような感覚と、世界が一斉に煌き出すような錯覚を感じて、今にも踊り出したい気分になる。

「ルカ様、先日はどうもありがとうございます。こんな場所でまたお会いできるなんて。ずっとお会いしたいと思っていました」

なんて幸運なんだろう!! ドキドキしていたら、ルカ様がドアノブを掴んだままのわたしの手に触れ、そっとドアノブから引き離れた。

大きな手に包まれる感触に、さらに胸のドキドキが大きくなる。驚いて振り仰ぐと、ルカ様が少し困ったような顔をした。

「そのドアを開けると警報機が鳴るんだ。そこに関係者以外立ち入り禁止と書いてあるだろう？」  
言われるままに目をやると、確かに扉の上の方に赤い字で書いてあった。ルカ様に顔を戻してよく見ると、耳にイヤホンのようなものがある。

私服の警備員。ふと兄の言葉を思い出した。警備のお仕事をされているのかしら。今の言動とこれまでのことを考えると、それは当たっているのかもしれない。

「あら、まあ。……申し訳ありません」

今度は恥ずかしさで顔が赤くなる。どうしていつも変なところばかり見られてしまうんだろう。いやもう、恥ずかしさを通り越して泣きそうだ。わたしは思わず俯く。

「どこか行きたいところがあるのか？」

低く、けれどとても優しい声が聞こえた。顔を上げると、ルカ様がわたしの顔をじっと見ていた。自然と唇に目がいつてしまった。見た目よりもずっと柔らかな唇。その感触を自分は知っている。そう思ったらさらに頭に血が上りそうだった。

「あ、あの。特別展示の場所に行こうと思って」

案内図を指さすと、ルカ様が頷いた。そして、わたしの手を引いて歩き出した。

ああ、これじゃあただの迷子とおまわりさんのシチュエーションだ。仮面舞踏会はどこにいったの？

それでも、彼と手をつなげるなんて夢のよう。まあ理由は情けないけれど。

でもこれってチャンスじゃない!? 今、お互いが知っているのは名前だけだ。ここでもうちよつとお近づきになって、ルカ様の情報が知りたい。

男性にまったく免疫のないわたしにしては、かなり大胆な思考だ。若干失速しそうになったけれど、舞い上がった心はまだ地に落ちてはいない。

「ルカ様は警備のお仕事をなさってますの？」

思い切って聞いてみると、彼が頷くのが見えた。やっぱり。だから騎士のように見えたのだ。

「だからお強いのですね！」

興奮気味に言う、ルカ様が肩をすくめた。

「きみは……少し危なっかしいようだな」

ぼつりと言われた言葉だけど、わたしの心には結構ぐっさり刺さる。確かに、これまでの邂逅は二度共ピンチのときだった。でも、どちらもわたしに落ち度はない、はずだ。二度目はともかく、一度目はまったく何もしていないのだから。

「わ、わたし、普段はちゃんとしています。家で仕事をしていますから、出歩くこともほとんどありませんし」

ルカ様が振り返ってわたしを見た。また困った顔をしている。彼がわたしを見ると、大抵こんな顔をしているような気がする。

困らせたいわけじゃない。できれば、まだ見たことのない笑顔が見てみたい。

「ルカ様はお着物にご興味がありますの？ わたし、家が呉服屋を営んでおりまして、今日こちらに出展しているのです。わたしは今休憩中ですけども」

手をつないだまま、ルカ様がまたわたしを見た。その顔からまだ感情は読み取れない。

「今日は仕事だから。でも、きみのその姿は綺麗だと思っ」

「まあ……恐れ入ります」

今のは褒め言葉よね？ 頬がまた赤くなるのが自分でもわかった。苦しくても暑くても、着てきた甲斐があったというものだ。

「き、着物は子どもの頃から着慣れております。でも幼稚園からずっとカトリック系の学校だった

んです。ですので和洋折衷<sup>せつそう</sup>とでも申しましょうか。家にはお仏壇も神棚もありますけれど、わたしの部屋にはマリア様の小さな像もあるんですよ」

自分でも何を言っているのかよくわからない。けれど、ルカ様が耳を傾けているのはわかる。家族以外の男性にこんな話しかけるのは初めてだった。初めてだけど躊躇<sup>ちゅうちゆ</sup>している場合じゃない。

彼との出会いはいつも偶然なのだ。偶然は何度も続かない。掴めるチャンスは掴んでおかなければ。まだつながっているルカ様の手を意識しながら、必死で自分のことを語った。何を話したのかよく覚えていない。それよりも自分のことばかり話してもダメだ。ルカ様のことも知らなければ。

「ル、ルカ様は日本語がお上手ですね」

思い切って尋ねると、彼は少し首を傾げた。

「母が、日本人なので」

「まあそうですの」

やっぱり。青い目と銀の髪だけど、どこか日本人っぽいところがあると思っただのだ。

——でも、どうしよう、これ以上話題が思いつかない。どこまで踏み込んでいいのかもわからない。世間一般の男女はいつたいどんな会話をしているのだろう。これが綾女だったら、今頃彼のプロフィールのほとんどを聞き出しているだろうか。

悩んでいるうちに、中心部にある特別展示の場所についてしまった。やはりすごい人だからだ。でもルカ様が手を引いてくださったので、最前列まで行くことができた。

目の前のガラスケースに、宝石のちりばめられた帯留めや、華やかなかんざしや髪飾りがあった。

豪華絢爛<sup>けんらん</sup>としか表現しようのない振袖は、広げて展示されていた。

「まあ素敵！」

思わず身を乗り出したわたしのからだに、ルカ様の腕が回る。まるで後ろから抱きしめられたような感覚に陥<sup>おち</sup>り、一瞬呼吸が止まった。

「目の前にロープがある。それ以上行くと危ない」

耳元で低い声が聞こえた。鼓動を抑えながらそれでも下を見ると、着物の裾が展示台を囲っているロープに触れていた。

「か、重ね重ね申し訳ありません」

ルカ様の腕がそつと離れた。体勢を整え、改めてガラスケースの中を覗きこむ。精巧な作りのかんざしや、髪飾りにちりばめられた宝石が煌<sup>きらめ</sup>いていた。豪華<sup>ごうしゃ</sup>な振袖は総刺繍<sup>そうしゅう</sup>で、うっとりするほど素晴らしい。

すべてをじっくりと見てから、振り返ってルカ様を見上げた。

「お仕事中に連れてきてくださってありがとうございます！ もしよかったですら、家族に紹介させていただきますだけませんか？ この間のお礼も言いたいですし」

思い切って自分からルカ様の手をぎゅつと握った。少し驚いた顔をした彼の表情が、なんだか嬉しかった。

「我が家のブースにご案内します。多分こっちはです！」

勢いよくルカ様の手を引いて振り返ったら、何かにゴンツとぶつかった。同時にけたたましいサ

イレンの音が鳴り響き、悲鳴と喧騒が同時に起こる。

呆然として見ると、ガラスケースが傾いていた。どうやらわたしが蹴飛ばしたらしい。幸いなことに中身は無事のようなが。

なんてこと！ 慌ててガラスケースを戻そうと伸ばした手をルカ様に掴まれた。

大勢の足音が聞こえた。四方八方から警備員が駆けつけてくる。ああどうしよう。わたし捕まってしまうのかしら。思わずルカ様にしがみつくと、背中中で結んである帯の上に彼の手がまわされたのがわかった。

「待て、大丈夫だ」

彼の低い声があった。それから、少しかがんでケースの台座の下に手を入れる。サイレンがピタリと鳴り止み、ざわめく声だけが残った。指示を出すルカ様の声が聞こえた。

「ケースをもとに戻せ。多少傾いただけだ。ロープが近いようだからもう少し離してくれ」

言いながら、ルカ様がわたしを引き寄せたまま移動した。

「本当に申し訳ありません」

どうしていつもいつも……。泣きそうになりつつも、なんとかつぶやいた。

「本当に、きみほど危なっかしい女性は見たことがないな」

そう言ったルカ様の声から感情は読み取れない。呆れているのだろうか。もう怖くて顔も見られない。

と、そのときまたバタバタと足音が聞こえた。顔を上げると、前方から兄が来る場所だった。

ああ、あつちもこつちも、もうどうしたら……

「雛子！ お前が原因か!?」

鬼の形相とはこのことだ。でも本当のことなので何も言えない。

「いえ、展示用ロープの位置が悪かったようです。お嬢さんには罪はありません」

ルカ様が助け舟を出してくださった。やはりこの方はわたしの王子様、いえ騎士様だ。

「妹がご迷惑をおかけして申し訳ありません」

兄がルカ様に頭を下げた。二人に連れられて店の場所に戻り、両親と一緒にもう一度謝罪した。

ルカ様は何度も大丈夫とくり返してくれたけれど、この歳になって親と一緒に謝罪だなんて、恥ずかしいやら悲しいやら。ルカ様との再会をドラマティックに妄想していた自分が馬鹿の代表になったみたいだ。

「雛子はここに座っていなさい。もう動くなよ」

兄に言われ、ブースの隅のパイプ椅子に座らされた。今までも色々やらかしてきたけど、こんなに情けない気持ちになったことはない。

忙しそうに接客をする兄や両親、楽しそうに行き交う人々を見ながら、何とも言えない気持ちになった。

ついさつきまで、あんなに楽しかったのに。せつかくルカ様に会えたのに、こんなことになるなんて。

何度目かのため息をついたとき、すぐ隣に誰かが来たのがわかった。顔を上げると、ルカ様が

まっすぐ前を見据えたまま、隣に立っている。

「ルカ様……。これもお仕事ですか？」

小さな声で問いかけると、前を見たままルカ様が答えた。

「この会場の中で、きみが一番危険人物のようだから」

頭の中で、ガーンと音がした。確かに、警報器のサイレンを会場中に響かせたのはわたしだ。違うとも言えず、またさらに情けなくなる。

ようやく会えたのに、ルカ様に迷惑ばかりかけて……。俯いて、膝の上に置いてある手をじっと見る。

「冗談だ」

また低い声が出た。振り仰ぐように見上げると、ルカ様がわたしを見て微笑んでいた。初めて見る顔、ずっと見たかった顔だ。

こんな状態なのに、単純なわたしの心はまた一気に舞い上がった。無数の花びらが二人のまわりに降り注いでいるような錯覚に陥る。

この人に幾度助けられたのだろう。わたしに目覚めのキスをした人。わたしを解き放ってくれた人。いばらの城から連れ出してくれた人。これが運命じゃなくてなんなの!?

その日、ルカ様は閉館までほとんどわたしの隣に立っていた。会話はなかった。彼はあくまで仕事で中だったから。——一応わたしもだけど。

ルカ様の存在を隣に感じている間、わたしにはこの人しかいない、漠然とそう思っていた。